

第3章 貨幣交換とマクロ動向(要約)

文 浩一

朝鮮では、2009年11月30日から12月6日にかけて5回目の貨幣交換を実施した。本章では、この貨幣交換の内容をマクロ経済の動きとともに分析した。

朝鮮が貨幣交換を行なった最大の目的はインフレの抑制である。2003年から市場の形態を従来の農民市場から総合市場へと名称を変更すると同時に、取引品目も拡大する緩和措置をはかった。しかし、市場は計画外で運営されるので、そこで流通する貨幣の多くは、中央銀行に還流することなく、市場内に滞留することになる。そこに財政赤字によって「予備貨幣」が発行され、マネーサプライが増加した。貨幣交換は市場に流れた貨幣を回収する役割を持っていた。

今回、貨幣交換を断行した背景には、2008年から財政収支が黒字となったこと、工業部門などである程度、生産が正常化したことがある。

しかし、貨幣交換後の朝鮮経済は一定の混乱を伴った。その理由は食糧が十分に確保できていないことによる。そもそも、インフレの要因である市場が拡大した背景には食糧不足がある。人々のエンゲル係数が80%を超えていることは国連の調査でも明らかになっているが、その購入先として国営流通網が十分に機能していないが故に人々は市場に依存する。

したがって、今後の経済の安定は、食糧生産の動向に依存する。今回の貨幣交換にともない、農業管理制度の改編が行なわれた。その柱は、収穫にたいする国家納付が従来の固定制から変動制（収穫に応じた割合）に変わったことであり、リスク分散によるインセンティブの向上が期待される。また、貨幣交換により一定の資金が国家に集中した。これをいかに効率的に投資するかがポイントとなろう。